

上信越高原国立公園（じょうしんえつこうげんこくりつこうえん）は1949年に設立された。2020年現在、国内で4番目に広い国立公園であり、面積は148,194ヘクタールで、群馬（ぐんま）県、新潟（にいがた）県、長野（ながの）県にまたがっている。上信越高原の多様な景観と、この様々な野生の動植物は、「我が国を代表する景観」という国立公園の定義にまさしく当てはまるものである。公園内には、南の浅間山（あさまやま）（2,568m）や北の苗場山（なえばさん）（2,145m）といった堂々たる山々のほか、火口湖や緑豊かな沼沢地、爽やかな高原地帯、数多くの温泉などがある。公園の自然環境の途方もないスケールと多様性にちなみ、山と高原もあるこの地域は、ハイキングやスキー、キャンプなどのアウトドア活動を行える「アウトドアレクリエーションワールド」と呼ばれることもある。

公園の北東にある谷川連峰（たにがわれんぼう）は、約440万年前に隆起し始め、その後、水や雪、氷河の移動による浸食作用によって特徴的なU字谷が作り出された。この過程で出来上がった山肌は険しくごつごつしているため、自生する動植物にとってこの連峰は厳しい環境となっている。谷川岳（たにがわだけ）（1,977m）自体は、登山者やロッククライマーの聖地としても知られている。山頂に手軽に行けるようにするため、1960年には山麓と天神平（てんじんたいら）の尾根を結ぶロープウェイが作られ、設備更新がこれまでに数回行われている。